

タイトル：2022 年度 中東☆イスラーム教育セミナー

日時：2022 年 9 月 16 日（金）

「米国植民地下フィリピンのムスリム統治と中東ネットワーク」

鈴木伸隆（筑波大学）

1898 年から開始された米国のフィリピンの植民地支配は、植民地フィリピンと本国米国（行政、議会、そして陸軍）を結ぶフォーマルな制度や政治機構との直接的関係から考察されることが一般的であった。しかし、フィリピン南部ミンダナオ島・スールー諸島に居住する非キリスト教徒（ムスリムや非ムスリム）の統治を理解するには、その視点の考察だけでは十分でない。近年米国、植民地フィリピンに、「中東ネットワーク」（本国米国を媒介にフィリピンが知のネットワークで中東と繋がる場合と、ディアスポラ・移民を媒介にフィリピン南部が直接中東と繋がる場合）を連関させる、新たな研究が誕生している。その一例が Oliver Charbonneau 著『Civilizational Imperatives』（2020）や Karine Walter 著『Scared Interests』（2015）である。双方に共通するのは、フィリピンでの米国によるムスリム統治を、同国から中東地域と繋がる多元的なネットワークの影響力による産物として、多角的に捉える複眼的な視点である。とくにオリバーは、米国のムスリムの文明化政策は、イデオロギー的にヨーロッパ帝国（英国、フランス、オランダ）やイスラーム帝国（オスマントルコ帝国）と共鳴・共振しながら展開してきたと指摘する。一方、オルターは米国のムスリム統治が、中東での米国宣教団による文明化運動と同時代性を有することに着目し、「グローバル・ミッション」との連続性に注目する。

本発表では、米国によるフィリピンにおけるムスリム統治を宗主国と植民地という二か国間関係から解き放ち、グローバル・ミッションという文脈に位置付けるために、1) ディアスポラ/移民、2) 中東起源のブローカーの役割、3) オスマントルコ帝国を媒介とした、米国軍人主導のムスリム復興運動、4) 米国宣教団による中東・フィリピンを包摂する国際的ネットワーク、という4つの視点に注目し、それぞれの事例紹介を行った。本発表でいう「中東ネットワーク」とは、便宜的にこの4つの束からなるものとした。この分析から明らかになったことは、米国は帝国建設者として新参者であり、同時にムスリム統治の経験がなかったことから、ディアスポラ、ブローカー、軍人、そして宣教師が有するトランスナショナルなネットワークとそこから得られるリソースをフルに活用することでしか、ムスリムの植民地統治を効果的に展開できなかったということである。資料的制約があったため、今回紹介した「中東ネットワーク」の存在は、残念ながらまだ「点」としか表現できていない。しかし、今回の作業を通して、人の移動、知の連鎖、そして帝国の絡み合いが織りなす複雑な「思想的連鎖」（山室信一）を紡ぎ出す上で、有効な視座であることは確認できた。今後「中東ネットワーク」の存在を少しでも太い線に持っていけるのが、今後の課題である。（了）